

masquerade part nine

number 7

限定100部の内の11/100

edited by dr masato mugitani

チャン・リン・スーの手品

麦谷真里

(はじめに) Chung Ling Soo はご存じのごとく、悲劇的な最後を遂げた職業奇術師です。そのため、最後のステージのエピソードだけがあまりにも有名で、実際にほかにどんな手品をやっていたのかというのは、たとえば、日本のマニアにはあまり知られていません。しかし、欧米では、この数奇な運命を辿った奇術師に関する本が何冊か出ています(写真187)。

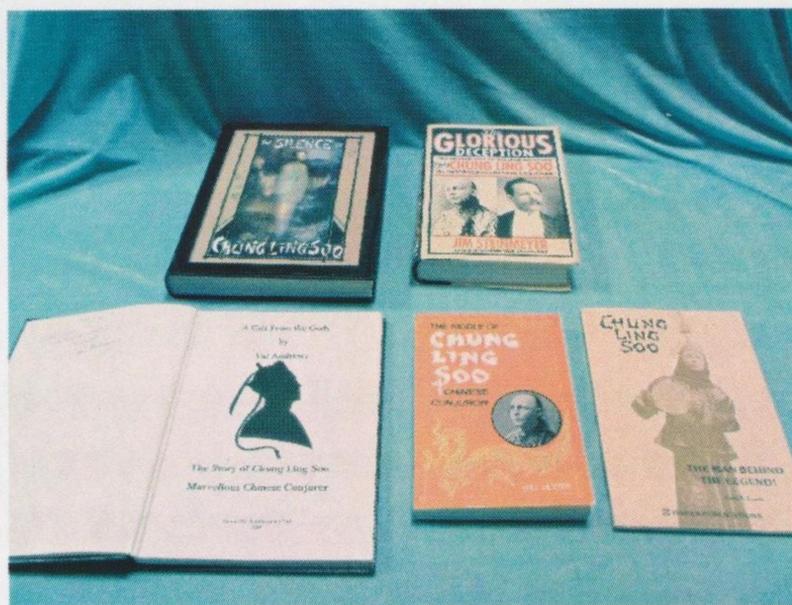


写真187

私が興味を持ったのは、今年、ある奇術大会のステージで、「チャン・リン・スーの最後のイリュージョン」と銘打ったイリュージョンを観たときです。演じたのは、Mark Kalin と女性マジシャンの Jinger Leigh です。最初に Mark Kalin が何か説明をしたのですが、私は聞き逃して、てっきり、チャン・リン・スーの最後のイリュージョンだから、それこそ“Bullet Catch”を演めるのかと思っていました。そうしたら、四方が枠になった長方形の縦長の箱を点検し、この四方にスクリーンを立てると、中から Jinger が出てくるというイリュージョンだったのです。この箱には厚い床がありますが、この

床も枠になっていて、一番下にはキャスターが付いていて箱を回転して周囲を見せることができます。回転するとき、底の枠にはスクリーンを付けないのでずっと向こうが見えている造りになっています。ちなみに、枠そのものは、観客席から呼んだ客が事前に点検する演出になっています。四方が枠だけでできている箱ですから、中から人間が出てくるのはそれなりに不思議です。演じている Mark Kalin が、ずっと大きな声で、“Chung Ling Soo's Final Illusion”と叫んでいるので、それが耳に残って、私は、チャン・リン・スーは、こんな洒落たイリュージョンも演っていたのか、と思いました。ただ、この「最後の」という言葉がどういう意味なのか、前述のように Mark Kalin は舞台上で最初に説明したのかもしれませんが、私は聞き漏らしました。Chung Ling Soo の舞台演目は、いくつかのプログラムが残っています。しかし、この「箱」の記述は見当たりません。現象として近いのは、“The Crystal Casket”というイリュージョンで、これは、Will Goldston が“More Exclusive Magical Secret”(1921年)の中で解説しています(写真188)。



写真188

Chung Ling Soo(程連蘇)こと、アメリカ人 William Ellsworth Robinson は、1861年アメリカのニューヨーク州で生まれ、1918年ロンドンで公演中の夜のステージで約2000人の観客が見ている前で亡くなりました。享年56歳でした。いわゆる「弾丸のキャッチ」の手品の弾丸が肺に当たって亡くなったものです。実際は即死ではなく、運ばれた病院で翌日の朝、息を引き取りました。この周辺には多くのエピソードがあり、そのひとつひとつは、なかなか興味深く面白いのですが、それぞれ他書に譲ります。私が驚いたのは、てっきり「弾丸のキャッチ」が最後の演技だと思っていたのに、Mark Kalin が、箱の中から Jinger の出てくるイリュージョンを「最後」と銘打ったことです。ということは、生きていうちに演じた最後のイリュージョンという意味か、と理解したのです。そこで、これに刺激されて、そもそも Chung Ling Soo が演じていた手品を調べてみたのです。

1. ライジング・カード

こんな普通の手品もやっていたのです。ステージですから、ジャンボ・カードだったと思われます。なかなか素敵な道具で、絵が残っているので見ると、ヒューレットの支柱がガラス製の道具です。カードを入れる部分までガラス製だったかどうかわかりませんが、少なくとも下の台は、機械が入っていますので透明ではなかったと思われます。Chung Ling Soo の使っていたライジング・カードの道具は入手できませんが、大きさや機構がほぼ同じライジング・カードの道具を参考までに掲

げておきます(写真189:下部のデッキは大きさの比較のために置いてあります)。



写真189

ヒューレットのカードを入れる部分は前後に二重になっていて、後方に、後でライジングさせるカードを入れておきます。ライジングして来る客のカードは3, 4枚ですが、もちろんすべてフォースです。カードの上げ方は、単純にテグスを縦に交互に掛けてあるもので、テグスの端をヒューレットのボックス部分に固定し、反対側の端をボックス下部の丸い部分にある滑車を通して、ガラス製の支柱チューブの中を通り、台の中に設置されたテグスを巻き込む機械に繋がっています。機械の動力は、この時代ですから時計と同じゼンマイです。機械を始動させるスイッチは、台のさらに下に付いている装飾の球のひとつを回転させて行ないます。スイッチと言っても、単にゼンマイを動かさないように固定してあった留め金を外すものです。機械が動き始めると、放っておいてもカードは次々に上がって来ますから、チャン・リン・スーはその動きに合わせて、あたかも自分がカードを操っているようなジェスチャーを行なうだけです。しかし、この当時、このライジング・カードを見た観客からは、ヒューレットの近くには操作を助ける助手もいないし、マジシャン自身も、ヒューレットから離れていて、何かを操作している動きがないのに、選ばれたカードが順に上がって来る現象は非常に不思議に見えたことと思います。このけっこう複雑な機構のライジング・カードの道具はおそらくチャン・リン・スーが自分で造ったものです。彼は、若いころ、ニューヨークのマルチンカ奇術用具店で奇術用具の製造を手伝っていましたから、これくらいの機構を考えるアイデアと造る技術は持ち合わせているのです。このとき、チャン・リン・スー自身が使っていたライジング・カードの道具は、金属とガラスでできていますから、機械が動くかどうかはともかくとして、100年経ったいまでも外形はおそらくそのまま残っていると思われるので、誰かが所蔵していれば、そのうちオークション市場に出て来るかもしれません。落札価格は、2~3万ドルくらいでしょうか？

写真189のヒューレットは後年製造販売されたもので、すべて金属製です。テグスは、支柱の中を通して台の下に出てきていますから、これを巻き込む機構を台の下に付け加えれば、現象としては、チャン・リン・スーのものと遜色なくなります。ただし、私の所有しているものは、ボックスも支柱も台も一体化して金属で造られているので、たとえば、支柱だけをガラスやアクリル製のものに交換するのは不可能です。

しかし、現代の奇術商品市場には、ジャンボ・カード用のライジング・カードに使うアクリルのキューレット商品はいくつも出ていますので(写真190)、こういうものにアクリルの支柱を備え付ければ、チャン・リン・スーのライジング・カードになります。しかも、現代のライジングのメカニズムは、カードの中に組み込まれていて、リモート・コントロールによってモーターを動かしてカードを押し上げるので、支柱の中にテグスを通したり、台の中にテグスを巻く機械を仕掛けたりする必要もないため、設置場所を選ばず、実際は、もっと不思議なライジング・カードになります。



写真190

2. リンキング・リング

リンキング・リングは、これだけでポスターを作っているくらいですから、チャン・リン・スーにとってはかなり自信のある好きな手品だったと思われます(写真191)。

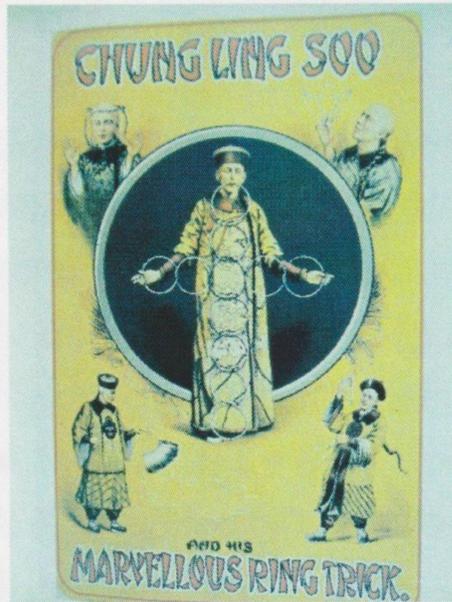


写真191

少し長めのステージのプログラムでは、ほとんどリンキング・リングを演目に入れてしています。使っていたリングの口径は、特に具体的な記載はありませんが、おそらく8インチ(20cm)か10インチ(25cm)だったと推測されます。リング同士が触れたときにいい音色が出るような材質だったようです。チャン・リン・スーは、リングを通常は10本、多いときは12本使います。彼のリンキング・リングの最大の特徴は、演技の最初にすべてのリングを観客に渡して調べさせることです。そういえ

ば、高木重朗さんも、いつも演技の前にすべてのリングを観客に手渡して調べてもらうことに意を砕いておられました。また、そのことを解説されたビデオも残っています。

チャン・リン・スーは、観客に10本のリングを調べさせたら、助手がひそかにキイ・リングをそれに加えます。あるいは、キイ・リングと普通のリングとを観客にわからないように交換します。ステージ上の10本のリングが11本になっても気付く観客はいません。キイ・リングが加わったら、それで、繋がったり外れたりする現象を見せることができます。さらにキイ・リングの数を増やす場合もあったようです。チャン・リン・スーのリンクング・リングはなかなかダイナミックで、空中に投げ上げたり、ステージ上に落下させたりします。最終的には、すべてのリングが一連に繋がってしまいます。1924年にパリで演じたときのリンクング・リングのクライマックスのスケッチが残っていますのでそれを掲げます(写真192)。

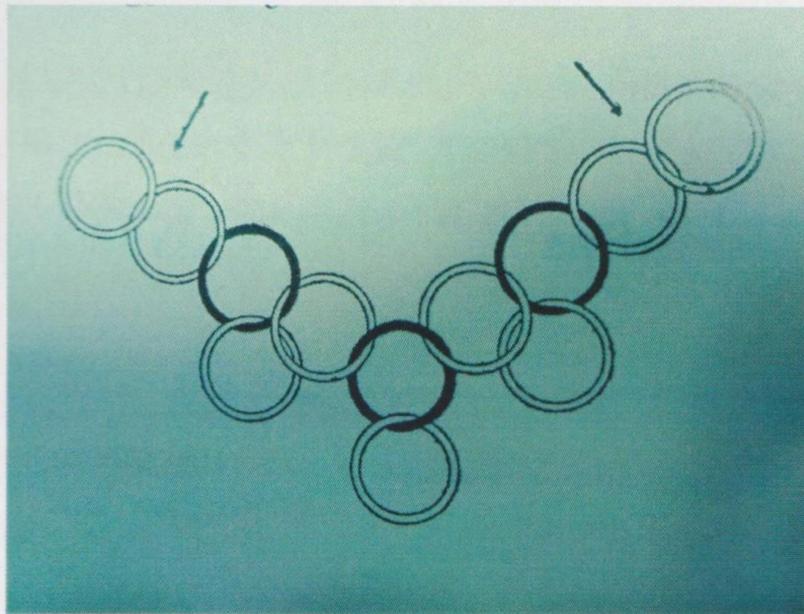


写真192

このスケッチで、矢印のところは両手で持っている箇所、実際にはこの部分のリングは繋がっていません。また、黒くなっている3本のリングはキイ・リングです。もちろん、ロックされています。

3. ライス・ボウル

チャン・リン・スーのライス・ボウルは2つ解説されていて、そのいずれも、現在われわれが演じているものとは異なります。

(1) Exclusive Magical Secret (1912年)に解説されたライス・ボウル(写真193)

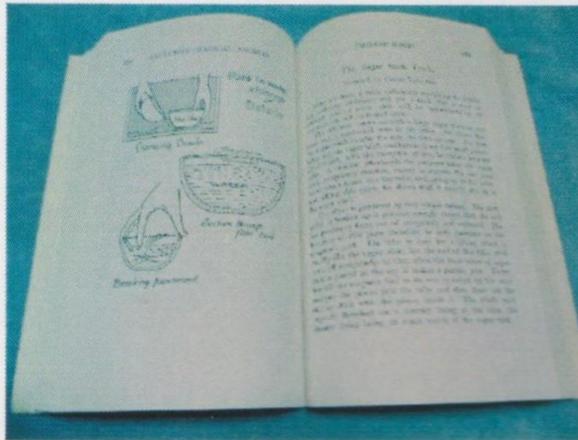


写真193

Will Goldston の解説には、絵を見れば一目瞭然で説明の必要もないとまで書いてあります。なるほど、タネはわかりますが、それをどうやって演るのか、は、「必要な動きでカバーして」などと書いてあるだけなので、まったくわかりません。この当時、ライス・ボウルの水の入っているほうは、薄い雲母の円盤で蓋をしてありました。したがって、雲母で密閉されたボウルを逆さまにしてテーブルに置く場合などは、雲母がテーブルにくっついてしまわないように、雲母とテーブルとの間に数本のマッチ棒を置いて、その上に雲母付きのボウルをセットしておくことが注意されています。

このチャン・リン・スーの手順は、その雲母の代わりに羊皮紙を使うもので、羊皮紙は紙ではありませんから、基本的に水を入れたボウルに蓋をすることができるのと、指で容易に破くことができることから、そうした性質を利用して構成されたものです。羊皮紙は、いまでも売っていますので購入することはできますが、要するに水の入ったボウルに蓋ができればいいので、現代のわれわれは、雲母や羊皮紙に拘泥する必要はありません。

[現象] 空であることを示した2つのボウルのひとつにお米をいっぱいに入れ、その上に空のボウルを逆さまにしてボウルの口と口とを重ねます。重ねたボウルを振ってから、テーブルの上に置いて、上側のボウルを開けると、お米は2倍になって溢れます。増えた分のお米を捨てて、再び2つのボウルの口を重ねて振ると、今度はお米が水に変化してしまいます。

[必要なもの](写真194)

- ①ライス・ボウル 3個 (標準的なものでかまいませんが、内側が白いものにします)
- ②ライス・ボウルに被せる伸縮性のあるカバー 1枚 (写真は(株)テンヨーのものですが、ボウルによってはサイズが合わない場合がありますので、そのときは、シリコン・カバーを使います)
- ③お米を入れる大きめのガラスもしくはアクリルの透明な箱 1個
- ④お米 ガラスの箱に4分目くらいになる量



写真194

[準備]

- ①3個のボウルのうち、1個に水を入れて、シリコン・カバーで蓋をして、ガラスの透明な箱の底の手前側(マジシャン側)に置きます(写真195)。この箱に、底に置いたボウルが隠れるくらいにお

米を入れます。透明なガラスの箱を使うのは、ボウルにお米を入れる作業を公明正大に観客に見せるためです。実際は、この過程で、ガラスの箱の中で堂々とボウルを交換します。

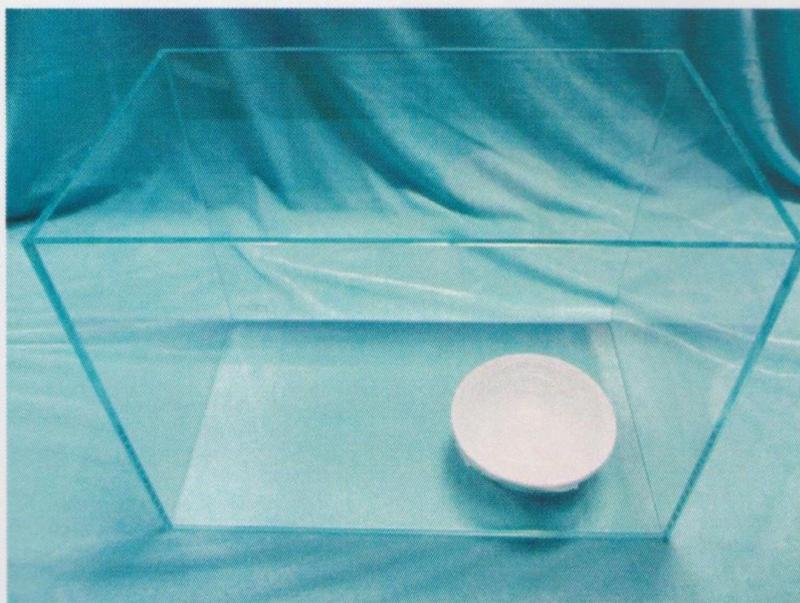


写真195

②残りの2個のボウルは、空のままテーブルの上に重ねて置いておきます。

[やり方]

①重ねてあった2個の空のボウルを左右の手にそれぞれ1個ずつ持って空であることを何気なく示します。「ボウルは2つとも空です」などと言う必要はありません。両手をガラスの箱の上に持って行きます。右手のボウルで、ガラス内のお米を軽く掬って、左手のボウルに入れます。まだ十分に入らなかった様子で、2回目にお米を掬いに行ったときに、右手に持っているボウルをお米の中に埋没させて、実際は準備しておいた水入りボウルと交換して、交換したボウルを取り上げ、シリコン・カバーの上に載った分のお米を左手のボウルに入れます(写真196)。右手のボウルはシリコンでカバーしてありますので、口を逆さまにしても大丈夫ですから、逆さまにすれば空になったように見えます。



写真196

②右手のボウルを、テーブルの上に伏せて置きます。左手のボウルがお米でいっぱいになってい

ることを示し、この上に、いまテーブルの上に置いたボウルを取り上げて、口と口が合うように重ねます。このまま両手で持ち上げて、ゆっくり上下に回転しながらシェーカーのように振って見せます。単に上下を入れ替えるだけでは観客にもわかってしまいます。一定のリズムをとって、上下に回転させながら、ボウル内のお米を混ぜる感じで動かします。チャーリー・ミラーは片手で持って重ねたボウルを上下に回転しながら口笛を吹きリズムを取ります。

- ③水の入っているほうのボウルが下になるようにしてテーブルの上に置きます。上側になっているほうのボウルを持ち上げると、あたかもお米が2倍になったかのように溢れ出ます(写真197)。右手のボウルはテーブルの上に置き戻します。

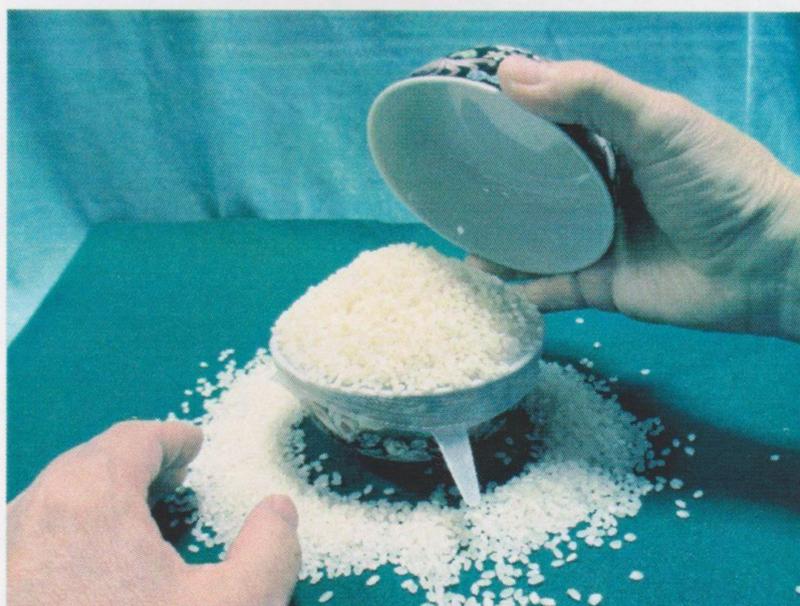


写真197

- ④溢れ出たお米は、ガラスの箱に戻します。このとき、ボウルを左手に持ってガラスの箱の上に持っていき、右手でお米を落としながらシリコン・カバーもガラスの箱の中に落とします。
- ⑤右手で空のボウルを取り上げ、左手のボウルに逆さまに重ねます。そして、軽く上下に振りますが、今度は水が入っていますので回転はしません。右手のボウルを持ち上げて口を上にして持ち、この中に、左手のボウルから水を注ぎ入れます(写真198)。入れたら、今度は逆に右手のボウルから水を左手のボウルに注ぎ入れます。お米が水に変わったことを示して終わりです。

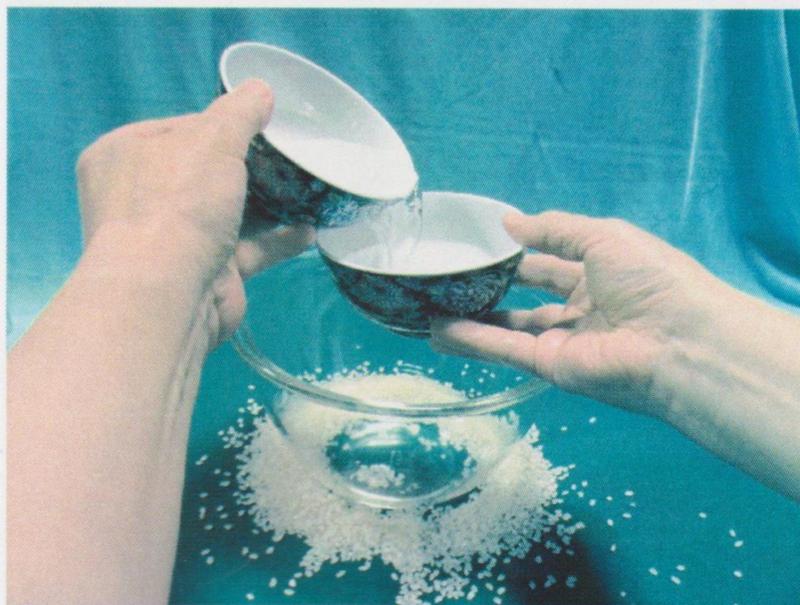


写真198

(2) The Young Conjuror(1919年)に解説されたチャン・リン・スーのライス・ボウル

今度も解説は Will Goldston です。現象の絵はよくできていますが、解説の絵は、わかりづらく、文章と照らし合わせても細かいハンドリングは判然としません。

[現象]空であることを示した2個のライス・ボウルのうちの1個にお米をいっぱいに入れます。このボウルにもう1個のボウルを逆さまにして被せ、少し振ると、お米が倍以上になって溢れ出ます。溢れ出たお米を捨て、再び、2個のボウルの口を合わせて振ると、今度はボウルから水が出て来ます。最後に、水の出たボウルに、さらに、もうひとつのボウルの口を重ねて振ると、また、お米が溢れ出て来ます。ライス・ボウルを知っているマニアでも驚く結末です。

[必要なもの]

①ライス・ボウル 2個

②ライス・ボウルの中にすっぽり嵌まる内張り用の半円金属 1個

(オリジナルの解説では金属になっていますが、現代では合成樹脂製のもので十分です。何かの容れ物だった半円形のものを探して利用します。半円の内側は、ライス・ボウルと同じ白で、外側には米粒をびっしり糊で貼りつけておきます(写真199:左側が加工前の樹脂。右側が米粒を外側に付けたもの)。また、最後に、内張りを180度回転させて、お米の山のように見せなければなりませんので、ボウルから外して回転させる場合の小さな目立たない「耳」を作っておきます。



写真199

③水を入れたボウルに被せるシリコン・カバー 1枚

(これも、(株)テンヨーのものを代用してもかいませんが、(株)テンヨー以外のボウルを使う場合は、大きさがフィットするとは限らないので、ボウルを密閉するように被せるシリコンのカバーを使います。シリコン・カバーは透明もしくは白いものが、キッチン用に安価な商品として一般市場に出回っていますので、その中から、大きさなどのサイズや使い勝手のよいものを選んで使います。また、これは、取り外し易いように、最初から「耳」が付いていますので、それを鉋などで目立たないサイズにカットすれば、そのまま使えます。)

④大きめのグラス 1個 お米を入れておきます。計量カップのようなものでかまいません。

[準備]

- ①米粒をくっつけた内張り用の合成樹脂を、米粒側を下にして、ボウルの中に嵌めて込んでおきます(写真200)。遠目には、空のボウルにしか見えません。



写真200

- ②もうひとつのボウルには水を入れて、シリコン・カバーをかけておきます(写真200)。
③内張りのあるボウルに水のいったボウルを重ねて口を上にしておきます(写真200)。

[やり方]

- ①2個の重なったボウルを示します。1個ずつ左右の手に持って何気なく空であることを示します。まず、水をセットしたほうのボウルをテーブルの上に伏せて置きます。伏せることで、暗黙のうちに空であることを物語っていることとなります。
- ②次に、内張りをセットしたほうのボウルの中に、グラスからお米をいっぱい注ぎ入れます。
- ③いま、お米を入れたボウルの上に、さきほど伏せて置いたボウルを口と口とが重なり合うように重ねます。両方のボウルを重ねたまま両手で取り上げて、上下に回転させながら振ります(写真201)。少しくらいお米が零れてもかまいません。

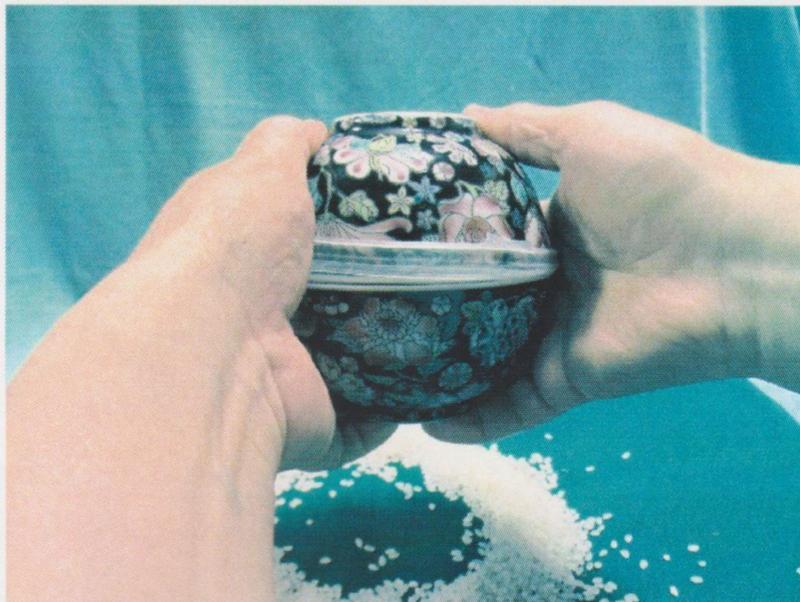


写真201

- ④水の入っている方のボウルが下になるようにして両方のボウルをテーブルに置き、上のボウル（内張りの入っている方のボウル）を右手で上方に取り上げます。お米が、山になって零れ落ち、あたかも、ボウルに入れたお米が2倍に増えたように見えます（写真202）。持ち上げたボウルは、そのままテーブルの上に伏せて置きます。

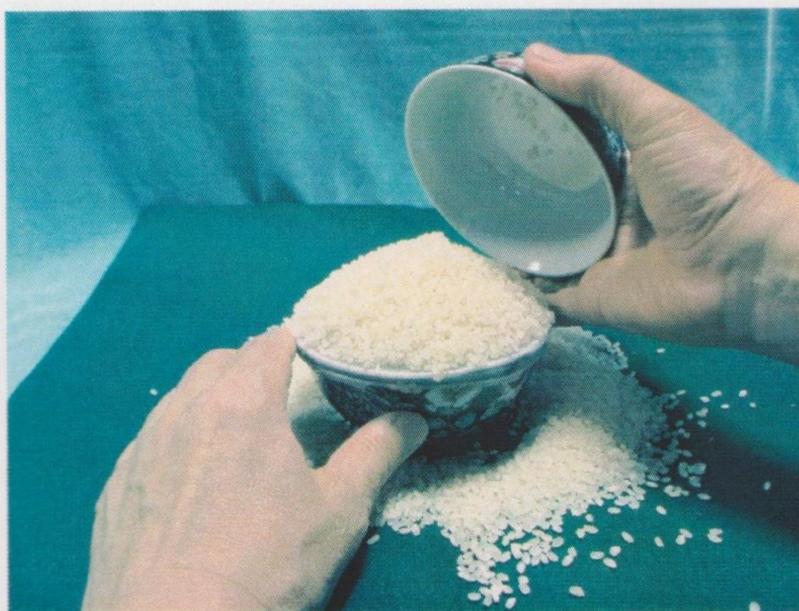


写真202

- ⑤増えたお米を手で丁寧に払ってテーブルの上に落とします。このとき、後で片づけやすいように最初にテーブルの上に布を敷いておくのも良い方法ですが、必須ではありません。お米を払いのけながら、同時にシリコン・カバーもテーブル上に落とします。観客は、まだ、ボウルの中にはお米が残っていると思っています。当然ですが、「まだお米は残っています」などと言う必要はありません。
- ⑥お米を払いのけたボウルの上に、テーブル上に伏せておいたもうひとつのボウル（内張りのあるほうのボウル）を口と口とが合わさるように重ねます。重ねた2つのボウルを両手に持って、上下に振ります。水が洩れて来ますから、左右に振る場合は、しっかり重ねて行なってください。今度は180度回転する必要はありません。
- ⑦左手に水のボウルが下になるように持って、右手で、重なった上のボウルを取り上げます。このまま左手のボウルから右手のボウルへ水を流して入れます。観客からは、お米が水に変わったように見えます。
- ⑧続けて、再び、右手のボウルから左手のボウルに水を流し入れます。観客から水の動きがよく見えるように、2つのボウルをやや上下に離して水のやりとりをします。また、この動作の中で、多少の水が外に零れるのはまったくかまいません。次の操作のためにも、少し水の全体量が減ったほうがいいのです。
- ⑨水が左手のボウルに流し入れられたところで、左手のボウルを水が入ったままテーブルの上に置きます。そして、このボウルの上に右手に持っていたボウルを口が下になるように逆さまにして口と口を重ねるように載せます。ここで再び、重ねた2つのボウルを両手で持って上下に振ります。今度も水が零れないように回転はしません。ボウルの上下を変えずに、重ねたまま2つのボウルをテーブル上に置きます。

- ⑩右手で、上になっているボウルを持ち上げますが、このとき同時に左手を下のボウルに当てて、上のボウルの下張りの「耳」をしっかりと押さえます。すると、内張りは左手のボウルの上に残り、右手は、空のボウルを取り除きます(写真203)。内張りに貼りつけてあったお米が山のように見えますので、観客は、水が、またお米に変化したのか、と驚きます。

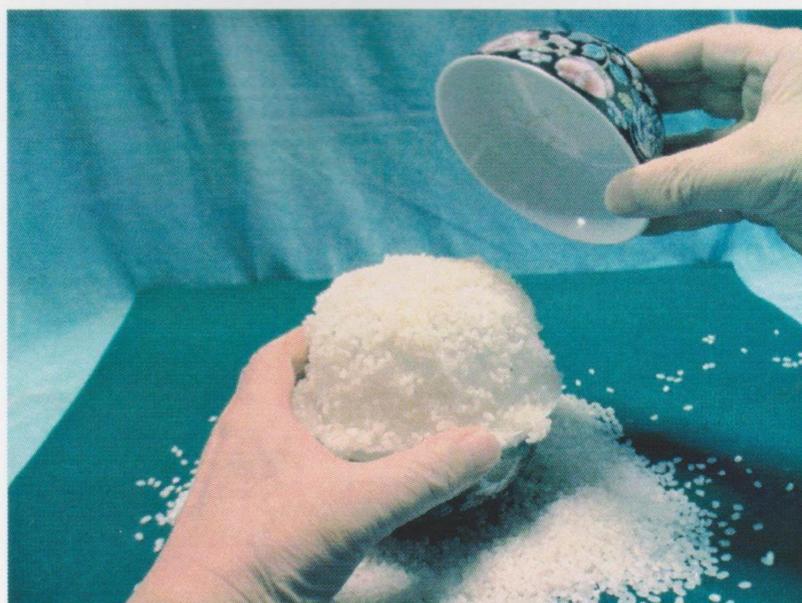


写真203

4. スピリット・スレイト

チャン・リン・スーは、ウィリアム・ロビンソンの名前で何冊かの手品の本を書いています。そのうち、1898年に刊行された“SPIRIT SLATE WRITING AND KINDRED PHENOMENA”という本は、かなり本格的な内容で、よくここまで書いたな、と思えるほどです(写真204)。

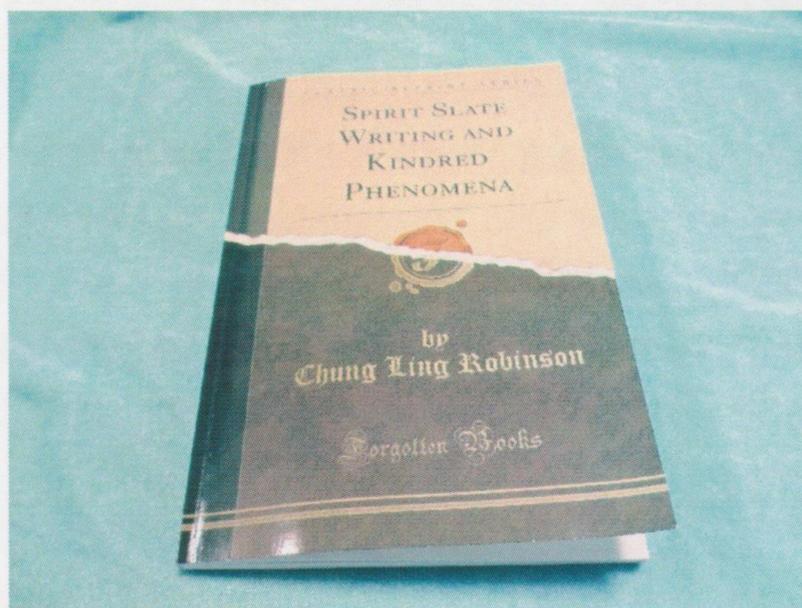


写真204

この本の著者の名前の下に、「故ハーマンの助手」と書き添えられています。「故ハーマン」というのは、当時一世を風靡したアレクサンダー・ハーマン(1844-1896)のことで、チャン・リン・スーは彼の元で1889年の秋から、ブラック・アートのマジシャンとしてだけでなく、さまざまな演目に重要な役割を果たして働いていました。したがって、「舞台監督」と書いても、誰も異論を唱えないと思うのに、「助手」というのは、かなり謙虚な言い方です。たぶん、何か理由があったのでしょう。私は、この本を読むまで、スレートというか黒板の手品に、こんなに種類があるとは知りませんでした。

した。それは、使い方だけでなく、それまで、磁石で余分なプレートをつけるスレートとか、せいぜい、枠が動いて下に別のスレートが現れるものしか見たことがなかったのも、そもそも、こんなに複雑に仕掛けのあるスレートがたくさんあるとは思わなかったのです。Spiritualism(心霊主義)が盛んだった19世紀から20世紀初頭にかけては、おそらく、心霊術や手品に数多く使われて演じられていた結果だと思われる。

ウィリアム・ロビンソンの解説はなかなか上手です。しかし、複雑な仕掛けのあるスレートはもう入手できませんし、交霊術のような演出は、最近の手品の世界では、ほとんど行なわれていませんので、現代でも応用できる2つの手品を解説します。

(1)磁石プレートを使うやり方

[現象]客に、デッキを渡してよくシャッフルさせます。そして、任意の場所でデッキをカットしてもらいます。マジシャンは小さな黒板を2枚取り出し、それも客に渡してよく調べさせます。客が十分に満足したら、黒板は2枚ともテーブルの上に伏せて置きます。客がカットしたところのカードを表向きにします。そこで、マジシャンがおもむろに、テーブル上に重ねてあった2枚の黒板を表向きにすると、何と、黒板に客のカードの名前が書いてあるのです。

[必要なもの]

- ①ミニ・スレート 2個 奇術市場にはいろいろな種類が出回っています。
- ②スレートに磁石でくっつくプレート 1枚 これも商品では通常、セットになって売られています。私は、TCCのセット商品を使っています(写真205)。

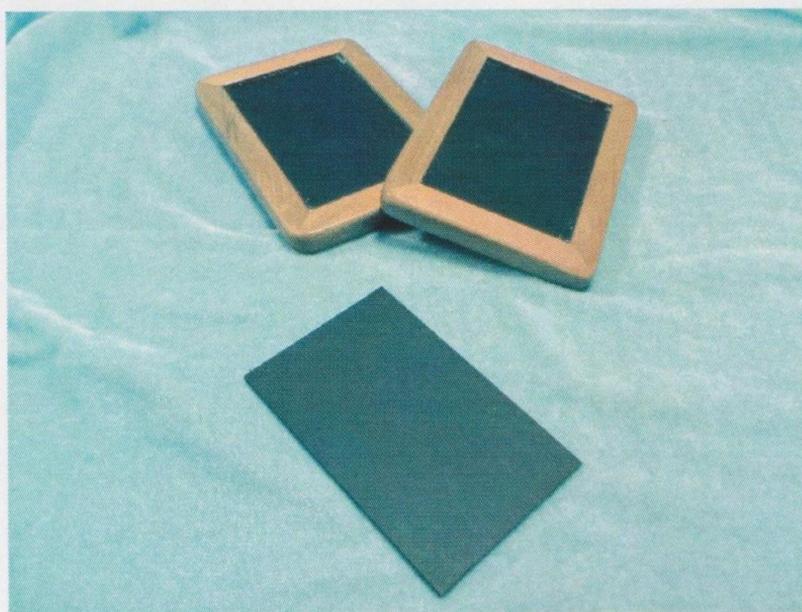


写真205

- ③手品用マット 1枚
- ④手品用マットと同じ色柄材質のものでプレートに貼れる大きさのもの 少々
- ⑤デッキ 1組

[準備]

- ①手品用マットと同じ色柄材質のものを磁石プレートの大きさに切って、片面に貼り付けます(写

真206:プレートをやや浮かせて撮ってあります)。ウィリアム・ロビンソンのオリジナルの解説では、テーブルクロスと同じ柄の布を貼り付けることになっています。これは、テーブルクロスそのものも用意しなければなりませんので、現実的に手品用マットにしました。

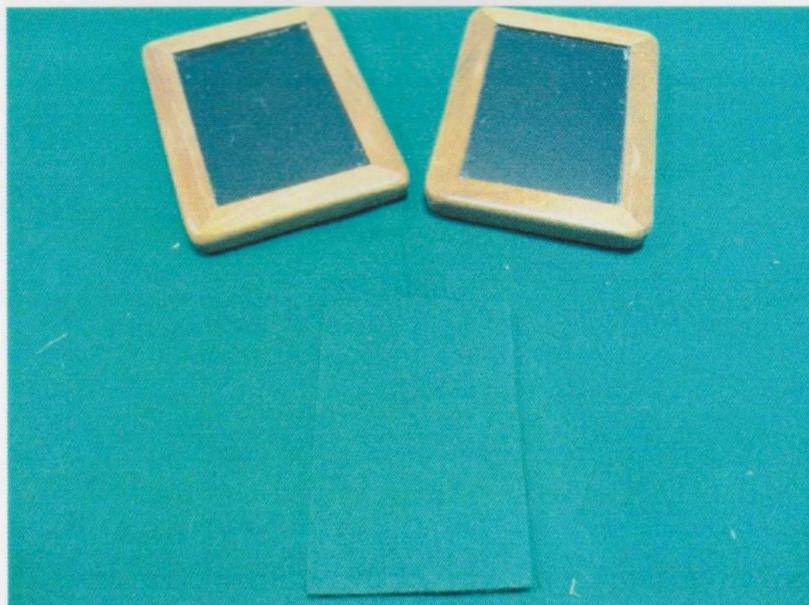


写真206

②マットを貼り付けた磁石プレートの黒板側に、客にフォースするカードの名前をチョークで書いておきます。ここでは仮に♡の8にしておきます(写真207)。



写真207

③この磁石プレートはマットを貼り付けた面を上にして手品用マットの上に置いておきます。同色のため、客は、このプレートの存在に気が付きません(写真206)。

[やり方]

- ①デッキを客に渡してシャッフルさせます。「トランプが全部で何枚あるかご存じですか？」と言いながら、ジョーカーを探す振りをして、ハートの8をトップに持ってきて、ジョーカーを取り除きます。ジョーカーをテーブル上に置きながら、「ジョーカーを除くと52枚あります」と言います。
- ②デッキをテーブルに置いたまま客に差し出して、「どこでもお好きなところでいいですから、トランプを何枚か持ち上げてください」と言います。客が持ち上げたら、それをテーブル上に置いて、

残りのカード群を十文字にするように、その上に重ねます。十文字になった下のカード群のトップがハートの8です。ビル・サイモンのやり方です。まだ、そのままにしておきます。

③2枚のミニ黒板を取り出して、観客に調べてもらいます。観客が満足したら、2枚とも手品用マットの上に置きますが、1枚は、予め準備しておいた磁石プレートの上に置きます。すると、磁石で自動的に黒板にくっつきます。

④「この2枚の黒板も重ねます」と言って、磁石のプレートが付いたほうの黒板を、そのままの状態を持ち上げて、もうひとつの黒板の上に十文字に置きます(写真208)。このとき、下部に磁石でくっついたプレートの位置を指先で調整します。客からはこの動きは見えません。



写真208

⑤「ところであなたがカットしたところのトランプは何でしたでしょうか？」と言いながら十文字に重ねたデッキの上側のカード群を持ち上げて、下のパケットのトップ・カードを表向きにします。ハートの8です。

⑥「黒板を見てみましょう」と言って、十文字に重なった黒板を2枚とも持ち上げて全体を180度ひっくり返してから、上の黒板を取り除けると下の黒板にハートの8と書いてあるので観客はびっくりします(写真209)。

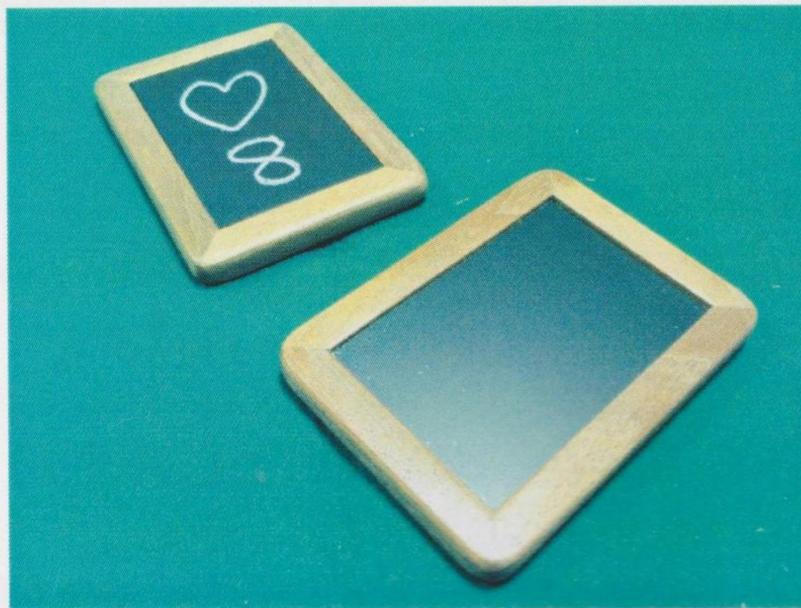


写真209

(2)スレート・ライターを使うやり方

スワミ・ギミックのスレート版があります。これは、サム・チップの腹にチョークが付いているもので、黒板にひそかに文字や数字を書くのに適しています(写真210)。

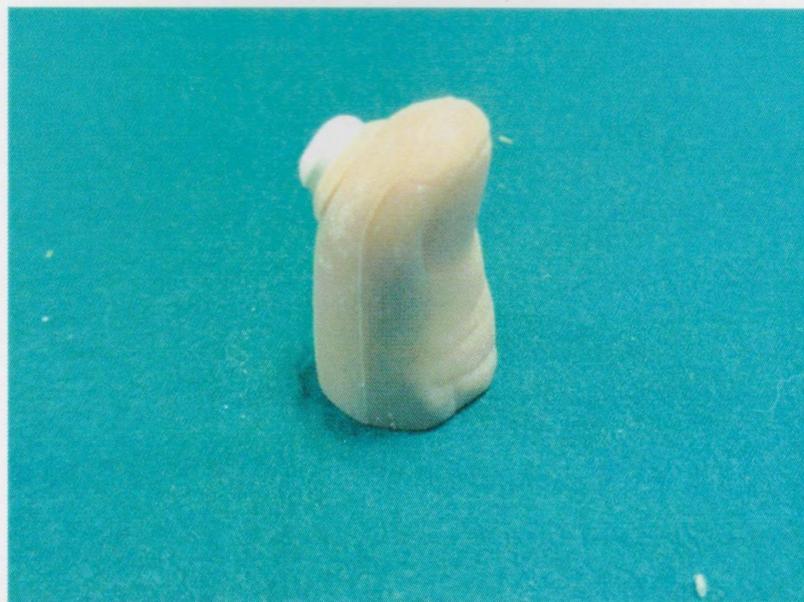


写真210

スレートの大きさやスレートの持ち方によって、ハンドリングが異なって来るのは当然です。チャン・リン・スーのスレートの解説書では、スレート・ライターを人差指に嵌めるようになっています。サム・チップの代わりにフィンガー・チップを使えばそれは可能です。さらに、このスレート・ライターをゴムで引っ張って袖の中に引き込んで処理するようなことまで書いてあります。プロの味がすると言えばそうなのです。それは、彼の時代の演出は、多くの場合、交霊術とか精神感應術のような体裁であったため、必ずしも明確な言葉や数字が書いてなくても何か書いてあれば、それだけで効果が絶大だったわけです。しかし、ここでは、もう少し現実的に、手品市場で入手出来るサム・チップ仕様のスレート・ライターを使って、クローズ・アップなどで演じることを想定して、ハンドリングを考えてみました。今度も、大きな黒板では、中央付近に書けないので親指が中央付近に延ばせるようなミニ黒板にします。

[現象]

マジシャンは2枚のミニ黒板を示し、2枚とも客によく調べてもらいます。客が満足したら、2枚の黒板のうち、好きなほうを選んで持ってしてもらいます。ここで、マジシャンは、「私は、こちらのほうに予言を書きます」と言って、マジシャンの持っている黒板にチョークで予言を書きます。次いで、客に、「1から10までの数字のうち、お好きな数字をひとつ選んでください」と言います。客が選んだと言ったら、数字を聞いてから、変えたければ変えてもいいということを強調します。客が変えないと言ったら、その時点で、その数字をチョークで客の黒板に書いてもらいます。ここで、マジシャンが自分の黒板に書いた予言の数字を見ると、客の選んだ数字と一致しているのです。

[必要なもの]

①手品用ミニ黒板 2枚。今度は、磁石プレートは不要です。黒板1枚でもできないことはありませんが、2枚あったほうがミスディレクションのためには有用です。

②スレート・ライター 1 個。これはすでに写真210に掲載しました。サム・チップにチョークが取り付けられるようになっているものです。チョークは交換できます。

③チョーク 1本

[準備]

サム・チップのスレート・ライターは始めから右手親指に嵌めておきます。

[やり方]

①ミニ黒板を2枚、それぞれ、左右の手に持って示します(写真211)。



写真211

②客に、「どちらでもお好きなほうの黒板をお選びください。それをあなたに使っていただきます」と言って、黒板を2枚とも渡して、好きなほうを客の手に残します。客が選ばなかったほうの黒板は、マジシャンが受け取って、右手親指が下側になるようにして持ちます(写真212)。



写真212

③「まず、私の持っている黒板に予言を書きます」と言って、右手でチョークを取り上げ、左手で黒板を立てて持って、予言を書くような振りをします。実際には何も書きません。

- ④「それでは、1から10までの数字でお好きな数字をひとつ選んでください。と言います。客が選んだ、と言ったら、「いくつですか？」と訊きます。客が怪訝な顔をしたら、「安心してください。もう予言は書いてあるのですから」と強調します。
- ⑤客の選んだ数字を仮に5とします。「5ですか。いい数字です。それでよければその数字をチョークであなたの黒板に書いてください。ただし、黒板に書いてしまったらもう数字は変えられません。5ではなくて、他の数字がよければ、変えるのは今です」と促します。ここで、仮に客が数字を変えて7にしたとします。「けっこうです。7ですね」と言いながら、もう数字を変えないかどうか確認します。客が変えないと言ったら、「それでは、チョークで『7』と黒板に書いてください」と言いつつ、マジシャンは、スレート・ライターで自分の黒板に『7』と書きます(写真213)。

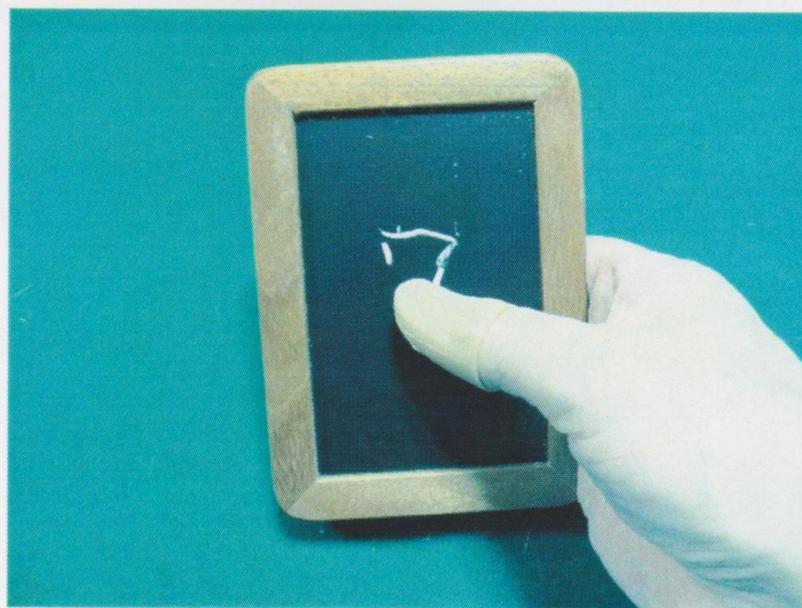


写真213

- ⑥スレート・ライターで数字を書く練習は、十分にしておかなければなりません。黒板を指先で持って、できるだけ親指を自由にして、黒板の中央に書くようにします。客は、自分の数字を書かねばなりませんから、マジシャンがスレート・ライターで書く時間は十分にあります。
- ⑦客が自分の黒板に数字を書いたら、「それでは、私の予言を見てください」と言って、持っている黒板を左手に渡してから、ゆっくりと客に見せ、数字が合っていることを示します(写真214)。



写真214

[コメント]

チャン・リン・スーは、このような手品演出ではなくて、心霊的な演出でした。ゴーストが数字を書くような演出です。19世紀ならそのような演出で十分に通用したかもしれません。私が使っているTCCのミニ黒板は、大きさや使い勝手などはちょうどいいのですが、商品は、届いたとき、黒板の両面にフィルムが貼られていて、これをきれいに剥すのに一苦労します。同様なものはかつてDPグループでも売っていたのに、こっちはもう販売してないようです。

5. ブレット・キャッチ

直訳すると、「弾丸の受け止め」でしょうか。チャン・リン・スーが最後に、この演目で非業の死を遂げただけに、避けて通るわけにはいきません。近年のマジシャンでは、ほとんど演じるひとがいなかったのですが、1982年に Paul Daniel がチャン・リン・スーのコスチュームを着てロンドンで演じています。直近では、Penn & Teller がラスベガスのショーで演じて話題になりました。これは後で詳しく述べます。

日本では、銃そのものの所持が規制されているため、ほとんどの人は銃や弾丸の構造にも詳しくなく、また日本でこれを演じているマジシャンはプロもアマも含めて皆無いため、いままで手品の本や雑誌で扱われたこともなく、マニアでも興味を持っている人は少ないと思われます。

ブレット・キャッチは欧米においては、マジシャンにも観客にも魅力的な手品なのか、16世紀にすでに演じられていて、18世紀、19世紀にも演じられ、20世紀には歴史の研究書まで出版されています。銃で撃つわけですから、常に危険と背中合わせで、これまでに12人のマジシャンや助手が亡くなり、11人が怪我をしたと記録にあります。

基本的な現象は、ピストル(短銃)またはライフルでマジシャン目がけて発射された弾丸を口(歯)もしくは手で受け止めるというもので、タネは、銃の発射音はするけれど、実際には弾丸は飛ばない、という仕掛けで、それでは観客が納得しないので、弾丸が発射されたことを証明するために、マジシャンの身体の前にガラス板などが設置されて、それらが弾丸によって破壊されることをもって、弾丸が発射されてマジシャンまで到達したことを間接的に証明するというものです。

(1) 弾丸の構造

基本的な弾丸の構造を写真215に示します。

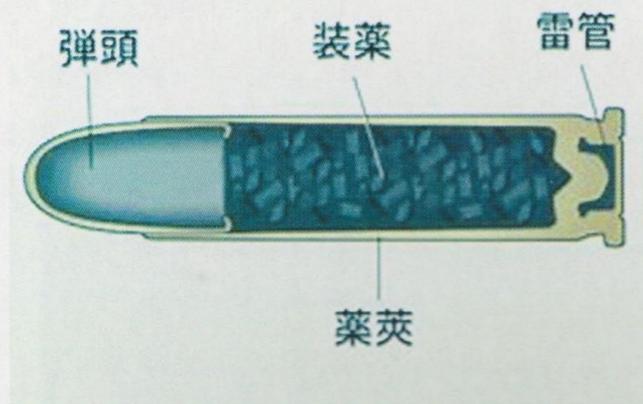


写真215

この写真のように、弾丸は2つの部分からなっています。いわゆる薬莖と呼ばれるカートリッジ部分と、飛んでいく弾頭・弾丸部分とです。カートリッジ部分には火薬が装填されており、カートリッジの底にある雷管が銃の撃鉄で打たれることにより発火し、それがカートリッジ内の火薬に火を点けます。火薬は瞬時に爆発しますから、音や閃光も出ますし、その爆発によって弾丸が前に飛びます。カートリッジそのものは、装着されたリボルバーのシリンダーなどから一緒に飛んで行かないようにデザインされています。ライフルの場合も同様です。

したがって、ブレット・キャッチでは、この弾丸部分さえカートリッジに装着してなければ、発射音と閃光は発しますが弾丸は飛びません。マジシャンの身体の前ガラス板などは別の仕掛けで破壊されることとなります。

キャッチする弾丸は、予め用意しておいて、直前にマジシャンの口の中に入れることとなります。弾丸に観客のイニシャルなどを書かせた場合は、どこかでスイッチする必要もあります。いくつか具体的な例を述べます。

(2)アレクサンダー・ハーマン

これは、1896年にサン・フランシスコの劇場で演じられていたものです。6人の兵士がライフルでハーマンを撃ちます(写真216)。鉛の弾丸が真鍮のカートリッジに装着されており、弾丸のほうに観客が印を付けて後で同定できるようにします。ライフルが6丁ありますから弾丸も6発あります。観客が印を付けた6発の弾丸は、金属のトレイに載せられます。6人の兵士のうちの隊長がこのトレイを受け取り、ステージに戻りますが、この間に、6個のカートリッジ付き弾丸は、弾丸の付いていないカートリッジに交換されます。これは、金属トレイがこのための特殊な構造になっていて、レバーを引くことによって、6個の弾丸付きカートリッジが、空のカートリッジに交換されるのです。兵士たちは、隊長の持つトレイから、弾丸なしのカートリッジを取り上げてライフルに装填します。その時点で、金属トレイは片づけられますから、助手は、ただちにカートリッジから弾丸だけを分離して取り出して、ハーマンが受け止めた弾丸を落とす皿を取りに来たときに、ハーマンの袖の中に6個の弾丸を入れます。ハーマンがステージ上で腕をゆっくり下せば、6個の弾丸は手の中に落ちて来ます。後は、これらをあたかもライフルから受け止めたように見せるだけです。ちなみに、この年、アレクサンダー・ハーマンのブレット・キャッチの助手として弾丸の点検や準備を行っていたのは、誰あろう若き日のチャン・リン・スーでした。

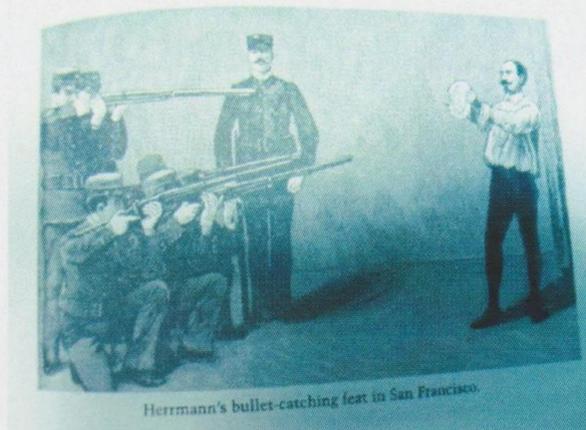


写真216

(3) モダン・マジック

ホフマン教授の「モダン・マジック」には、第16章の「その他の奇術」の項に、「魔法の弾丸」と言うタイトルで解説されています。銃はやや旧式タイプのもので、いわゆるライフルやリボルバー銃ではなくて、火薬と弾丸を直接銃身に装填する短銃形式のもので（写真217）。

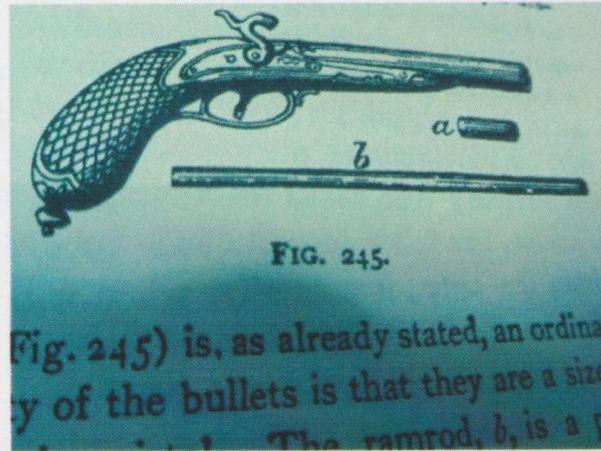


写真217

仕掛けは、「ラム」と呼ばれる弾丸の装填棒（写真217の b）にあります。これと、金属製のチューブ（写真217の a）を使います。このチューブは5cmほどの長さで、一方の端は開いていますが一方の端は塞がれています。細かいハンドリングや演出は省きますが、火薬を銃身に入れた後、隠し持ったこの金属チューブを閉じた底が下になるようにしてひそかに銃口から銃身に入れます。さらに、その上に弾丸を入れて、「ラム」棒で、上から押しながら弾丸をこのチューブの中に詰め込んで行きます。その作業の過程で、棒をチューブの上端の中に押し込んで嵌めるのです。そして、そのまま棒を上を引き上げれば、弾丸を詰め込んだチューブが棒と一緒に引き上げられ、弾丸は外に取り出されます。このとき、棒とチューブの繋目は、指で押さえて隠して取り出します。結果として棒は5cmほど長くなっていますが、気が付く観客はいません。ちなみに、「ラム」棒とチューブとは外見が同じに見えるように造ってあります。

(4) チャン・リン・スー

チャン・リン・スーは、2本のライフルを使います。撃つのは二人の助手です。そのときの舞台の写真が残っています（写真218）。一番右端に皿を持って立っているのがチャン・リン・スーです。

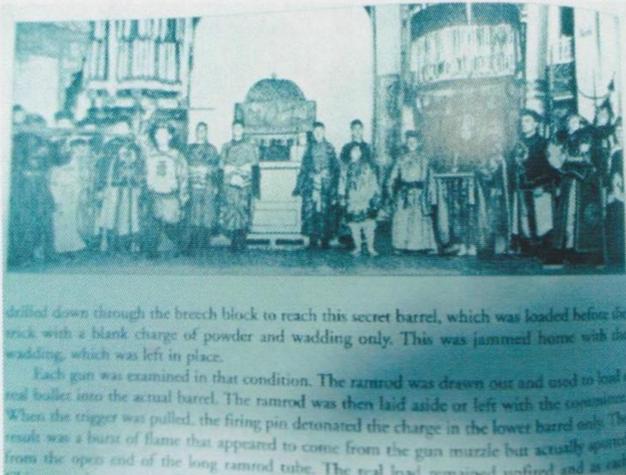


写真218

私がこの写真を観て最初に思ったのは、こんなに人が混み入った状態でライフルを撃っていたのか、という驚きです。これだと、仮にライフルから弾丸が飛ぶのなら、間違えて他の誰かに当たる可能性があるからで、これは、おそらく全員の集合写真を撮るためにポーズをとっただけで、実際の「ブレット・キャッチ」の演技のときは、こんなにも周囲に人はいないのだと勝手に理解しました。あるいは、実際には弾丸は飛ばなくて安全なので、これくらい人が密集していてもよかったのかもかもしれません。

ライフルは、旧式のもので、火薬と弾丸をライフルに付属している棒で、銃身に込めるタイプのもので、通常は、そのための専用の棒(「ラム」)が各々のライフルの下に装着されています。弾丸は、ステージ下の観客に印をつけてもらい、さらにそれをステージ上に招待した別の2人の観客に確認してもらう形式です。ステージ下の観客が印をつけた弾丸は、助手(この場合はチャン・リン・スー夫人)の持っている錫のカップに入れてステージに運ばれます。そして、この間に予め別の印をつけた弾丸とすり替えて、ステージ上の観客に渡します。ステージ上の観客は、弾丸に印がついているので、これはステージ下の観客が任意につけた印だと勝手に思い込むのです。よくできています。すり替えられた弾丸はそのままライフルに装填されます。一方、チャン・リン・スーは、予め印のつけた弾丸をもう2個持っていて、これを、ライフルで撃たれたあと、皿の上に出して見せるのです。すなわち、弾丸は計6個使います。最終的には、皿の上の受け止めた形の弾丸を再度ステージ下の観客が印をつけた弾丸とすり替えて、印を確認してもらいます。

チャン・リン・スーのライフルは、銃身に込めた弾丸の火薬には火が点かない構造になっていて、したがって、ライフルの銃身からは弾丸が発射されません。一方、弾丸を銃身に込める「ラム」棒が収納してあるライフル下部の部分は、やはり丸い筒のようになっていて、ここに火薬だけが装着してあり、ライフルの引き金を引くと、銃身ではなくて、この下部の筒のほうの火薬に火が点いて、あたかも弾丸が発射されたかのような音と閃光が出ます。

1918年3月23日の悲劇の夜、2本のライフルのうちの1本に金属疲労や摩耗が見られ、本来は、火が点くはずのない銃身本来の火薬に火が点いて、銃身の中にあつた弾丸が発射されてしまいました。このことは、彼の死後に開かれた法廷で明らかになりました。

(5) ペン&テラー

前述のように、現役のマジシャンで、「ブレット・キャッチ」を演目に入れているのは、ラスベガスのRioというホテルで常設のステージでショーを行なっている Penn&Teller だけです(写真219)。しかも、これも数年前の話で、現在(2022年)は、すでにこの演目は彼らのプログラムからは消えています。

「ブレット・キャッチ」では、銃を撃つのが兵士であつたり助手であつたりしますので、いくら信頼関係があつても、マジシャン側の不安というか危機管理は完璧ということはありません。その点、ペン&テラーは、マジシャンが2人いて、お互いにお互いを銃で撃つわけですから、弾丸が決して銃から発射されないことが担保されていて、準備と手続きさえ周到なら、それなりに安全な手品だと言えます。



写真219

演出も現代的で、銃も「コルト・パイソン357マグナム」とかなりの heavy duty な銃を使います(写真220)。実際にステージで使う銃は、これにレーザー照準が装備されています。



写真220

演出は、ステージの奥から客席まで長いリボンの帯が設けられていて、このリボンの線の両側にペンとテラーがそれぞれいて、弾丸を銃で発射する以外に交換する術がないことを暗に物語る演出になっています。弾丸にもカートリッジにも観客にサインさせて、銃を撃った後、口(歯)で受け止めた弾丸をそれぞれの観客にサインの確認をさせます。カートリッジにもサインさせる理由はよくわかりません。カートリッジは、銃の中に残っていて飛ばないので、発射後そのまま銃の中に残っているのは当然だからです。ただ、確かに、このカートリッジに装着されていた弾丸が発射されて、カートリッジが空になっていることを見せることはできます。

以下の私の解説を読む前に、一度動画で二人の実際の演技をご覧になると、手続きや演出がよくできているので感心されると思います。当然ですが、サインされた弾丸は、カートリッジから外されて事前に交換されます。弾丸そのものは小さいのでいかようにもパームが可能です。カートリッジに装着されてあるのがひとつのミスディレクションになっていて、演技のある時期からカートリッジしか見えないのにお気づきの方もいらっしゃると思います。弾丸は、最初にステージ奥のガラ

ス板を取りに行ったときに、おそらくガラス板を支えるロッド(筒)を通じてステージ下の助手に落とすのです。弾丸の軌道上にガラス板を置くのは一種の演出ですが、これは最初から軌道上に設置しておけばいいのに、わざわざステージ奥まで取りに行くのは、その動きが必要だからです。したがって、弾丸はステージ下の、観客の見えない場所で交換されます。次いで、この弾丸は、ペンとテラーがそれぞれ防弾チョッキや防弾ゴーグルを装着するためにステージ奥に行ったときにひそかに助手から渡されます。渡された弾丸は、防弾装備を着ている間に口に入れます。弾丸はすでに交換されていますし、「コルト・パイソン357マグナム」に装填されたカートリッジには弾丸が付いていませんから、レーザー照準で相手の口を目がけて撃っても弾丸は飛びません。ガラス板は、おそらく遠隔操作で割ります。歯の間に受け止めた弾丸のサインは、それぞれの観客に確かめてもらいます。非常によくできています。

6. コメント

ウィリアム・ロビンソンは、当時のトップクラスの職業奇術師であった、ハリー・ケラーやアレクサンダー・ハーマンの元で働いて研鑽を積み、やがて、中国人マジシャン、チャン・リン・スーとして自分の世界を確立しました。今回、チャン・リン・スーに関する複数の文献を渉猟した結果、私は彼の人生を何回も辿ることになりました。波乱万丈とも言える彼の人生はともかくとして、もっとも驚いたのは、当時のプロ・マジシャン同士の競争の激しいことで、次々と新しいイリュージョンを考えねばならず、ヨーロッパのマジシャンの舞台からもヒントを得て、常に斬新で不思議なイリュージョンを模索していたことは、今回初めて知りました。そのような背景があったからこそ、たとえば、デ・コルタのバニッシング・レディがただちにヨーロッパやアメリカの他のマジシャンによって演じられたのも頷けます。翻って、たとえば、現在プロ・マジシャンが轟めくラスベガスでは、いまでも、このような熾烈な戦いが繰り広げられているのでしょうか？観客動員という観点からすれば、各ホテルにとって、人気のマジック・ショーを館内に持つことは、興行的にだけでなく宣伝としても有利だと思います。実際、少しでも切符の売れ行きが悪くて空席が目立つようなマジック・ショーはすぐに中止になります。必ずしもそれまで誰も見たことのない斬新なイリュージョンを演じなければならないということではなくて、たとえば、フラミンゴのピフ・ザ・マジック・ドラゴンのように、ユニークでエンタテインメントに富んだショーであれば十分に生き残れるのです。ハラレのマック・キングや、リンクのマット・フランコのように、特段新しいイリュージョンや手品をやっているのではなく、普通の手品を工夫して上手に演じているだけで相応の人気はあるのです。ひと昔前なら、シーザーズ・パレスやミラージュの自分の名前を冠せた専属劇場でショーを持つのがマジシャンの目標でしたが、いまでも厳しい競争があるにせよ、ある程度の独自性を出していれば、そこそこやっていけるのではないかというのが私の印象です。

これは、masquerade part9 の No.7 です。

連絡のメールアドレスは、masqpart4@aol.com です。

2022年10月